# 会員のひろば

## 俳壇

### 歴研よこはま

#### 身辺雑詠

竹内　章二

病み上がりせめてものお洒落夏帽子
あと千歩励ます妻や天高し
ひと夏で眩しくなりぬ孫娘
フェアウエイを思ふがままに赤とんぼ
秋彼岸墓前の供花に遅れとり

#### 盆太鼓

竹村　清繁

籠枕抱へて風を探すかな
風鈴をさがし当てたる夜の風
町中が祭りの顔となってきし
頂きに月を残して踊り果つ
漆黒の海へ打ち込む盆太鼓

#### 星月夜

高島　治

湖の雲に乗りたる目高かな
我先に羽習わしの燕の子
穴子鮨シャリを食み出すこと五寸
衣被さらりと里に帰りたし
大の字に寝て一景の星月夜

#### 雑詠（秋・冬）

内山　昇

屹立の谷川連峰冬ざるる
ためらはず真葛が原を分け入りぬ
家々の軒先占めて千大根
茶の花を一輪活けて茶室とす
せせらぎの水音も秋法師宿

#### 雑詠（夏）

谷川　操一

扁額の埃気になる梅雨じめり
梅雨深し一際目立つ赤信号
胡瓜揉む妻の二の腕美しき
夜の卓蟻一匹がさ迷ひぬ
威厳見ゆ泰山木は祖父の花

#### クリスマス

藤盛　詔子

錠剤の転びし行方目借時
つながらぬ夢のきれぎれ明易し
夫恋ふはいつもこの刻夕焼雲
竿先に空をはさみて柿を捥ぐ
電飾のトナカイ駆くるクリスマス

# 歌壇

## こはま

### 高野賢彦

歌作りいつも心に思えども猛暑ゆえにか頭うごかず

さりながら何とかせんとペン取れど花鳥風月ときにあらずか

JKの孫のオーボエ聞かんとて列車で行けど歌心さえず

さればとて田舎の友に話かけるも寄る年波みか男子(おのこ)おらず

思い立ちミレー館へ行きけるが「晩鐘」なきが玉に瑕なり

夕食に末弟呼んでメシ食えど故郷の町は昔日の影なし

あれこれと故郷のこと思えども知人すくなく遠くなりけむ

### 市川康夫

白木蓮のはな散りにけり月の夜にそは遥かなる夢のふるさと

月の夜にドビュシーのうた白波と戯れにけりわれ聴きにしは

眠りをるか浜辺の蟹は月の夜にはや潮は引き砂すがしきに

月の夜に媾ひ曳くふたり藷畑忍び寄る賊よせつけぬがに

山の端の梢さびしも月の夜に北風すさび槻の木たかし

月の夜に江水寒く清しきに淪落のひと琵琶を弾じぬ

白居易「琵琶行」、白氏文集〇六〇三

惑星は並びをりけり月の夜に列ただしうし黄道はるか

菅原道真を悼む、拾遺和歌集四七九

# 歌

## 歴研よ

### 竹村紘一

いずれ行く道とはかねて思えども浮世の縁は断ち難きかな

朝霜を踏みしめて行くあしたかな逸る心を如何に抑えん

上方のあざとい策に嵌められて遂に落ちたり九戸の城

坂東に将門偲ぶ民多し賊とされるも甘んじて受く

旧友に最後の別れ告げる時花一輪を棺に入れたり

気が付けば隣家の熟柿落ちにけり人に知られず寂しくもあり

久々に軍歌歌いて昂揚す戦好まぬ我が身なれども

### 山本修司

霧の松薬筆使い静謐な等伯描く大気に心服

宗達にたらしこまれた雲に乗り二神睥睨ひょうきん顔だ

しんしんと厳しき夜の蕪村図は人家の灯雪が暖か

観山の落日浴びる弱法師の薄くれないに心ときめく

大王に狂うて奉ず花がたみ松園描く顔が神業

瓢箪の棚守景描く納涼図ちからが抜けて極楽気分

漆黒の闇薬王の炎御舟の舞いは捨身の行か心粛然

# 詩壇

## 歴研よこはま

### 「抒情組曲」

丹下重明

鋭い無調の響きと
十二音の上下のきざみ
やすらぎと不安の交叉

ふと顕れるロマンの香り
あまい陶酔のひと時
清冽な音のながれ

再びの無調のトレモロ
熱い風が吹き抜ける
やがて透明な静けさのなか
現代の音は終わる

ベルクの「抒情組曲」
弦楽合奏編

ブーレーズによる
ニューヨーク・フィル
この現代音楽の源流に
みずみずしい美しさを
鋭い刃物のような音で
表現している

### 「セッテンバー　秋への思い」

高野賢彦

青空高く真っ白な鰯雲が流れるセッテンバー
酷暑の八月に比べ　秋の風物詩が心地よいこの頃だ
シューベルトの歌曲を聞き終えたら
鎌倉の国宝館で仏像展を見学しよう
観音菩薩立像は古典美の極致だ
仏壇で見慣れていた観音様の姿
その優しい姿がいつも思い出される
仏像展を見たら　いつものように角のレストランで昼食を取り　アンミツを食べよう

風の音　赤トンボ　彼岸花　色づいた田圃
セッテンバーの素晴らしい雰囲気
セッテンバー！　その響きは
なんと心地よいことか

ところで近頃　列車の長旅をしたことがない
遠からず西国へ旅に出ようか

車窓の風景　思い出　ぼんやり過ごす時間の贅沢
昔　住んでいた芦屋を訪ね　神戸や明石へも
また安芸へ移り住んだ武田家の話をした広島へも・・・

そして帰りには奈良へ寄ろう
永久に古拙の笑みを浮かべている如意輪観音を拝み
「柿食えば・・」の寺から築地塀に沿ってのんびり歩こう
また遥かな唐の明州の海辺で「天の原ふりさけ見れば・・」と詠んだ阿部仲麻呂の望郷を偲び　遣唐使一行が長安へ旅立つとき　航海の安全を祈ったという春日の御蓋山も眺めよう

いずれにしても奈良のセッテンバーを実感し　最後に京都へ立ち寄ろう
　そして清水寺へ　また建礼門院の寂光院を訪ねよう